

讀賣新聞

2013年(平成25年)

10月12日土曜日

大阪市北区野崎町5-9 電話(06)6361-1111(代) www.yomiuri.co.jp

延命医療「望まず」81%

医師と対話「不十分」50%

本社世論調査

読売新聞社の全国世論調査
(9月28・29日実施、面接方式)で、終末期に延命

のための医療を受けたいと
思うかどうかを聞いたところ、「そうは思わない」と
答えた人が81%に達した。
人生の終わりに備える「終

活」が広まる中で、多くの人
が最期は自然な形で迎え
たいと考えていることがわ
かった。

終末期の延命医療につい
て、日本の医療現場では、
医師と患者・家族との間で
十分な話し合いが行われて
いると思う人は35%にとど

まり、「そうは思わない」
が50%だった。

終末期に受けたくない医
療などについて「家族と話
をしたことがある」は31%
で、「ない」の68%が大き
く上回った。自分で判断で

く「事前指示書」を作りた
いと思う人は44%、「そう
は思わない」43%、「すで
に作っている」1%となっ
た。

末期がんなどで回復が見
込めない状態になつた場
合、最期まで自宅で医療を
受けたいと思う人は44%。
「そうは思わない」は50%
だった。実際に希望しても
最期まで自宅で医療を受け
ることは難しいと思う人は
79%に上った。その理由を

きなくなつた場合に備え、
終末期医療の意思を文書に
残す「リビング・ウィル」

や「事前指示書」を作りた
いと思う人は44%、「そう
は思わない」43%、「すで
に作っている」1%となっ
た。

医療現場でも実感
という回答は83%を占め
た。

△詳報14面▽

複数回答で聞くと「介護などで家族の負担が大きい」
が最も多く、「お金がかかる」「容体の急変に対応できない」各37%など
が続いた。回復が見込め
ない状態になった場合、
そのことを告知してほしい
という回答は83%を占め
た。

新田国夫・全国在宅療養
支援診療所連絡会会長の話
「延命医療を望まない人が
81%」というのは医療現場の
実感と合致する。10年ほど
前は『とにかく命は助ける
ものだ』と末期がん患者に
も人工呼吸器をつけたりし
ていた。医療者も一般の人
も意識が変わった。現状は
約8割が病院で亡くなつて
いる。多くの人は当たり前
のように「最期は病院で」
と考えているようだが、在
宅療養が広まれば変わるだ
ろう」